

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

【世界防災フォーラム PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—】

○山崎氏　それでは時間となりましたので、宮城県主催プレナリーセッション「被災地からの経験・教訓の共有と継承」を開催させていただきます。

本セッションは有識者・実践者の皆さんによるパネルディスカッション形式で進めてまいります。コーディネーターは、宮城県震災復興・企画部、伊東部長にコーディネーターをお願いしております。伊東部長、よろしくお願いします。

○伊東部長　皆様、ようこそおいでくださいました。

私は、このセッションのコーディネーターを務めさせていただきます、宮城県震災復興・企画部の伊東と申します。よろしくお願いします。

このセッションのテーマでございますが、タイトルにありますとおり、東日本大震災被災地の経験・教訓をいかに伝えていくのかということについて、お話を進めていければというふうに思っております。震災からですね、6年8か月が過ぎました。

風化というような課題も出ている中で、本当に多くの犠牲、それから多くの被害を出してしまった宮城県として、その経験・教訓を世代を越えて伝えていくこと、それから海外も含めて他の地域の皆様に伝えていくこと。

それが宮城県の責務じゃないかということで、これについては多くの方に同意をいただけるのではないかとこのように思っております。

ただですね、本当に伝えていく、続けて伝えて、二度と同じようなことが、同じような犠牲が起こらないために、どうしたらいいのかということについては非常に難しいということで、宮城県では今、有識者の皆さん、それから被災市町の職員の皆さんと一緒に、その在り方検討というのをしているところでございます。

そこで本日は、国内外の第一線で、この災害被災地の記憶、記録、教訓、そうしたものをですね、伝承について研究されている皆様、そして実践をされている皆様にお集まりをいただきました。

これまでの課題と、その課題を受けてですね、今後どのようにしていったらいいのか、必要な視点、考え方についてご紹介をいただきながら、会場の皆様と一緒に考えていきたいというふうに思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、早速でございますけれども、パネリストの皆様方に自己紹介を兼ねながらですね、災害伝承に関して、どのような視点、テーマで研究、実践に取り組まれているのかということをお聞きしていきたいというふうに思います。

早速でございますが、では初めにですね、京都大学防災研究所教授でいらっしゃる牧先生、よろしくお願いいたします。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

○牧教授 はい、皆さん、こんにちは。こんばんはかな。

京都大学防災研究所の牧と申します。

自己紹介ということで、京都大学でございまして、私たちが語り継ぎ、伝承の対象としておりますのは町として阪神・淡路大震災ということになります。

阪神・淡路大震災は、もう早いもので22年、来年の1月の17日で23年目ということですので、大学の学生もすでに経験をしていないと、そういう世代になっております。

やはり語り継ぎというのは非常に難しく、自分のことをいつも思うんですけど、私、1968年生まれですので、戦争ですね、第2次世界大戦が終わって、ちょうど22年目ぐらいに生まれたんですが、戦争の話というのを大人から聞いてたりするんですけど、やっぱり実感がありません。

それが今、22年経った阪神・淡路大震災の状況だというふうに思っております。

自分が戦争の体験をしておられる方は、実感をお持ちだと思うんですが、本当に子どもとしてよくわからなかったんですが、そういった感覚をいかになくすのかということが、すごく重要なんじゃないのかなというのが22年、23年を迎える神戸の話です。

そういったことも踏まえて、あとで詳しくはお話をいたしますが、1つは災害メモリアル・コンファレンスという活動がですね、震災の1年目から始まりまして、10年目までは先輩方々。20年目も、先輩方々。

30年目、何を30年やと言っているのかと思われるかもしれませんが、30年目指して語り継ぎというか、震災の教訓をどう伝えていくのかという活動しております。

それから、もう1つ、あとでこれもお話をしますが、もう1つ、今お勤めしているお仕事がございます。

聞かれた方もあるかもしれませんが、神戸に人と防災未来センターという施設がございます、その名前を正確に言わないといけないんですけど、資料研究主幹ということで、こちらにもたくさん、物の資料ですね、ですとか、紙の資料というのがあるんですけど、それをどう保存していくのかだけではなくて、やはり、それをどう使っていくのか。やはり物が語りかける力っていうのは非常に大きいものですので、そういったことで、あとでお話をしたいと思います。

それから、もう1つ、視点ですが西日本、これは必ず東北から学ばないといけないところですけども、南海トラフ地震というのがございまして、それに対して、この東北の、本当に大変な体験をどう生かすのか。本当に、生かさないと逆に怒られると思うんですが。というふうなことで今、考えております。今日は、よろしく願いいたします。

○伊東部長 ありがとうございます。

続きまして、常葉大学大学院教授の重川先生、お願いいたします。

○重川教授 はい、引き続きまして、常葉大学から参りました、重川と申します。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—」

よろしくお願いたします。スライドをお願いいたします。

まず自己紹介なのですが、私が勤めている大学はご覧のとおり、背中に富士山があります。目の前に駿河湾があります。

ということで、自然災害の危険性がかなり高いところに立地をしております。

そこで環境問題、防災問題を日々教えている。簡単な自己紹介です。

私自身が、自分自身がいろんな災害の教訓伝承を語り継ぐというのは、口幅ったいですけども、残していかなきゃいけないというきっかけとなったのが、22年前に起きた阪神・淡路大震災でした。

実は、この地震は昭和34年に伊勢湾台風が起き、それ以降なんと36年ぶりに国内で1000人以上の死者が出たという規模の自然災害となりました。

従いまして40年近くもの間、日本は自然災害に対して非常に、なんていうんでしょうか、のほほん構えていたところにきたのが、この地震だったわけです。

ですから行政のみならず、市民も企業も、あらゆるものが次に何が起きるのか読めませんでした。そのために今、何をすればいいのかを考えることができませんでした。

さまざまなことに初めて直面しました。

例えば避難場所というのは、難を避けるはずの場所だったんですが、避難場所で500人亡くなりました。あるいは仮設住宅に入ったその先で孤独死も起きました。

我々はみんな、過去の災害の教訓を紐解こうとしました。

例えば、関東大震災の復旧・復興を記録した、たくさんの報告書がありました。

でも、それを見るとですね、目次を見ると、計画、監理、建築、土木、公園、区画整理。ハードな事業のことばかりしか出ていませんでした。

一方、阪神大震災のあとに出された復興の報告書が右側なのですが、見ていただくとですね、トップに出てくるのが生活、文化、そして住宅です。

まちづくり、都市インフラ、ハードな話は報告書の一番最後の部分に回っています。

このように阪神大震災というのは、私たちの防災対策の在り方を大きく見直すきっかけになりました。私たちが、そのときに始めたのがエスノグラフィック調査というものでした。

公式の報告書とかデータではわからない、さまざまな災害の移り変わりをしっかりと記録をする。

現場で苦労した方たちから直接話を聞いたり、直接その場所に身を置いて観察をする。

そういった方法で、災害対応の記録を残す。

それを、この阪神大震災からスタートをさせました。

例えば東日本大震災でも、行政の方、あるいは首長さん、いろんな苦労をされた方たちに、1年、2年後から順番に記録を取るということを続けています。

私たちが阪神大震災以降やりたかったことは、まさに、ここに書いてあるとおりです。

災害を経験した、それぞれの方たちが持っている、分散して蓄積されている、いってみれば、その人がいなくなってしまうたら残らないような、その場限りの経験を、なんとか集

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

めておきたい。

それを個人の経験ではなくて、体系化して、次の災害のために残し、共有しておきたい。そんなことを考えながら、この22年間、防災研究を続けてきたといったようなところで

す。
以上で終わらせていただきます。

○伊東部長 よろしくお願いたします。

それでは、続きまして東北大学災害科学国際研究所准教授の佐藤先生、お願いたします。

○佐藤准教授 ご紹介ありがとうございます。

東北大学災害科学国際研究所の佐藤翔輔と申します。

それでは、スライドをご覧になりながら、お話しを聞いていただければと思います。

私、今、主に2本立てで仕事をさせていただいております、1つは研究の活動ですね。もう1つは、実践的な活動ということをやっております。

研究のほうはですね、東日本大震災が起きる前の伝承のこと。

今、起きたあとの被災地で行われている伝承が、どういう効果を持っているかということの計量的な、数値的な研究に取り組んでいます。

実践的な活動については、次にお話される藤間さんが所属されている、みらいサポート石巻さんをはじめですね、今、被災地で行われている活動を後ろから応援する、サポートするような活動もさせていただいております。

研究のほうなんですけども、今ですね、1つ凝っているのが、津波に関する石碑ですね。

石碑と語り部さんということで、非常に注目してやっております。

これらを総称して、私どものほうでは津波伝承知メディアという名前をつけて研究をしています。

その1つ注目した津波碑のほうなんですけども、これは岩手県にある陸前高田市の全ての津波碑について調査しまして、それが震災前にですね、ちゃんと認識されていたかどうか。

その危機をちゃんとわかっていたかどうか、知っていたかということ調査しまして、どんな石碑がきちんと知られているかということの特徴を整理する研究を行ってました。

実はですね、これだけ多くの方が亡くなられた東日本大震災の中でもですね、実は犠牲者が全く出なかった集落というのが、いくつかございます。

そういった集落に入って、なんで、あんなに大きな津波がきたのに亡くなった方がいなかったのかみたいなことも調査をさせていただいてます。これは岩手にある2つの集落ですね。

太田名部というところと八木というところですが実は先ほどご紹介した津波碑を作っているだけでなく、これを使った慰霊のイベントをして忘れない取り組みをされてました。そういったこと背景には、どんなことがあったかということで、併せて、また陸前高田

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

で調査をしたんですけれども。

早く逃げた方はどういう方だったかということの特徴をきちんと調べますと、ちょっとこれ、見づらんですけれども、実は家族で災害が起きたことをきちんと話し合っていたり、そういった昭和のですね、三陸の津波を忘れない活動を続けていたことによって、津波の避難行動が早かったということが、計量的にわかっております。

今、ご覧になっていただいている地図は、我が国で災害の伝承に関する場所ですね。

ミュージアムとか語り部さんとかアーカイブ、そういったものの分布を示しています。

緑のプロットがですね、実は語り部さんなんですけれども、非常に東北地方に集中しています。

これは無形の活動が今、東北に多いということの証拠にもなります。

これはですね、大変見づらうございますが、藤間さんをはじめ、今、この宮城県内で行われている震災伝承のプログラムとか、展示施設とかパークとか遺構とかの分布を示しています。こんなにたくさんあります。

実はそれぞれ、みらいサポートさんと一緒に行ってですね、利用されてる方がどれぐらいいるのかなといいますと、実は2013年をピークに利用されている方が下がってきているということもわかってきてしまいます。

そういうものの原因は何かとか、特徴は何かということも併せて調査をさせていただきます。

そういったことをですね、なるべく減らないように、より活性化するためということで、各被災地で市民と行政と一緒にあって対話をする場を持つような活動をやっております。

これは石巻市さんの例でございますけれども、昨年ですね、実は民産学のメンバーで、これから市の伝承をどうやっていくかという活動もさせていただきました。

私、実は情報系の出身なものですから、やはり情報系の取り組みもということで、これ、実は震災の教訓をウェブで快適にご覧になれるウェブサイトだったり、あと今回、震災で撮影された津波の映像ですね。

そういったものを地図上で検索できるシステムなども作っておりますので、ぜひ、ご覧になっていただければというふうに思います。

今ですね、私、走りながらいろいろ考えておりますので、まとまっていないですが、私の自己紹介とかえさせていただきます。お願いいたします。

○伊東部長　ありがとうございます。よろしく願いいたします。

それでは続きまして本県、宮城県の姉妹自治体でございます、アメリカ・デラウェア州のデラウェア大学からお越しいただきましたトリシア教授、よろしく願いします。

○トリシア教授　ありがとうございます。特に宮城県様に対し、この仙台で開催される重要なフォーラムにお招きいただきましたことを感謝いたしております。私は、トリシア・

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承ー東日本大震災を中心にー」

ワクテンドルフと申しまして、デラウェア大学で、社会学の教授をしておりますとともに、同大学災害研究センターの所長の一人でもあります。

デラウェア大学災害研究センターは、災害の社会科学やマネジメントの側面に焦点を当てた、世界で最も歴史がある研究機関です。災害社会学及び災害科学のパイオニアであるエンリコ・クワランテリ教授及びラッセル・ダインズ教授によって設立されました。現在、当センターには9名の教員がおります。代表的な分野である社会学、公共政策学、土木工学、地理学等の他、多くの関連のある分野の教職員や大学院生も我々の研究プロジェクトに取り組んでおります。災害を重要な社会問題として扱う研究に加え、学際的な取組として、4つの分野における大学院生向け複数プログラムや、比較的新しい学際的な災害科学及びマネジメントについての修士・博士レベルのプログラムを設けております。また、災害の社会科学・マネジメントに焦点を当てた世界で有数の蔵書コレクションも所有しております。

我々は、「緊急対応」というフィールドリサーチ法のパイオニアとして知られておりまして、災害直後の状況の観察を行うというものです。私の研究の多くが、救援物資の運搬、避難に関する組織的な意思決定、災害に対する社会の脆弱性、緊急時の臨機応変な対応力、創造力等のテーマに焦点を当てております。例えばニューヨークで9.11同時多発テロが発生したときを振り返ると、無計画にボートで避難した方々が50万人ほどいました。

その他、学際的な取組として、大気科学、工学、コンピューター科学や他の社会科学の分野と関わる研究も、同僚と共に行っております。

2011年の震災の後、何が起きているのか、日本がどのようにこの災害に対応し、経験しているのかを調査するため、研究を行いました。ちなみに、この調査チームには本日のパネルリストの方々もいらっしゃいました。

今後も、多くの大学の同業者たちと研究を続けていくつもりですが、本日強調してお話したいことは、エンジニアや大気科学者たちと研究しているような学際的な分野ではありません。むしろ、複雑な課題について理解し、災害というものを違った視点で学ぶため、社会学の知識と芸術、人文科学、写真等を融合した研究についての話題にフォーカスしていきたいと思います。

○伊東部長 ありがとうございます。よろしく申し上げます。

それでは自己紹介の最後になりますが、震災の最大の被災地・石巻で伝承活動を実践されています、公益社団法人みらいサポート石巻の藤間さん、お願いします。

○藤間氏 よろしくお願ひいたします。

宮城県石巻市から参りました、公益社団法人みらいサポート石巻でですね、震災伝承のプログラムを担当している藤間と申します。

私は震災後に石巻市にボランティアで数日滞在したことがきっかけで、神奈川県から移住

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—」

をしてまいりました。今現在6年、活動しております。

私が所属しているみらいサポート石巻という団体は震災直後にですね、地域で立ち上がった団体になります。

当初はですね、震災を伝える活動を行うために立ち上がった団体ではなくて、震災直後、全国から多くのボランティア団体、NPO・NGO団体が石巻に駆けつけてくださる中、団体同士がですね、活動の調整をしたり連携をするために、毎晩ですね、ミーティングが行われていました。

そのミーティングのですね、事務局機能からスタートしたのが私たちの団体になります。最初のそういったミーティングは3月20日、震災から9日後にNPO・NGO連絡会という名前で始まっています。

その後ですね、その年の5月13日に法人格を取って、今の前身となる一般社団法人石巻災害復興支援協議会という名前で活動をしていました。

緊急対応期にはですね、NPOやNGOや特別なスキルを持ったボランティアの方たち。特別なスキルというのは看護師さんですとか、また理容師さん、美容師さんのように髪の毛がカットできますとか、マッサージができますとか、そういったですね、スキルを持ったボランティアの方たちが円滑に活動を行うための調整やサポートを行ったりですとか、避難所の衛生改善事業ですとか、入浴支援事業なども実施していました。

その後、災害救援から復興支援へとフェーズが変化するのに伴い、支援という一方的な言葉がですね、状況に見合わなくなってきたのではないかと団体内でも話し合っていてですね、翌年の11月に、私たち、今の団体名であります、みらいサポート石巻という名前に名称を変更して、石巻に、よりよい未来に向けた取り組みを行う地域のリーダーや団体とともに石巻を支える活動ということで移行してきています。

そしてですね、2015年には、7月に宮城県より公益認定を受けまして公益社団法人となり、現在はですね、震災支援の連携から震災伝承の連携へと活動をシフトしているという、そういった団体になっております。

私自身ですね、こういった石巻にボランティア活動として最初に来ようと思ったきっかけは、先ほどから何度も挙がっております阪神・淡路大震災がきっかけでした。

当時、高校2年生だったわけなんですけれども、神奈川県横浜で朝、テレビをつけてみたら神戸の街が火事になっている、そういった映像を見て、とても衝撃を受けたのを今でも、とても覚えています。

やっぱり、そのときに全く動けなかった自分というのを東日本大震災が起きたときに思い出しまして、それでですね、今回は動こうと思ったのがきっかけで今、活動を続けています。

ありがとうございます。

○伊東部長　ありがとうございます。よろしく申し上げます。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—」

皆さん、ありがとうございました。

まさにですね、最先端で今、研究、実践に取り組んでいただいている皆さんにお集まりいただいたということ、わかっていただいたかなというふうに思います。

これから本題に入っていきたいと思います。

まずですね、日本、我が国では昔から本当に多くの地震災害、あるいは風水害、災害が発生してきておりまして、被災のたびにさまざまな経験・教訓が蓄積されてきているというものもあるんですけども、一方で、やはり先ほどもお話ありましたが残念ながらですね、また混乱した光景、犠牲などが再現されてしまうということもあったかというふうに思います。

ここですね、かつての震災の経験・教訓が今回の東日本大震災においてどのくらい生かされたのか。

あるいは、どのような点が生かされなかったのかという点についてお聞きしたいと。

そして、それがですね、結局こういう言葉がいいかどうかあれですけども、伝承が機能した、機能しないと、そこを分けたというものの要因についてですね、お考えがあればお聞きしていきたいというふうに思います。すいません、早速ですが牧先生、お願いします。

○牧教授　　ひと言で、生かされたのか生かされてないのかというのを答えるのは、ちょっと難しくて。

防災対策を考えるときに、私たち命を守ることと、それから、先ほど藤間さんがお話になった避難所の生活みたいな、命をつなぐということと、それから今、宮城県で皆さんが取り組まれている復興という、この3つのフェーズがあるので、それぞれについてお話をしようと思いますが。

まず命を守るという観点からすると、先ほど佐藤さんのお話にもありましたように、ある程度は生かされたのかなというふうに思うんですが。

命をつなぐ、それから復興というところになると、なかなかうまく教訓というのが伝わっていなかったのかなと。

一部、先ほど藤間さんがお話しになられたボランティアコーディネーションみたいなのは、阪神のときは本当にぐちゃぐちゃでしたが、それが中越を経験し、うまくいったりということはあるんですが、やはり復興ということについての教訓というのが、なかなかうまくいってないのかなというふうに思うんです。

復興って、災害直後にも私たち、こちらにお伺いして、時間かかるんです。

10年かかるので、ものすごく急いでも、これは、なんともならないんですということ、申し上げたんですけど、そんなに待てるかということとか、もっと急がなきゃというふうなことが、当時の雰囲気だったように思いますが。

やはり10年で終わるかどうかという、非常に長いプロセスですから、そこを、どううまくやっていくのかみたいな教訓は神戸にあったんですが、なかなかうまく伝わってなかつ

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

たのかなということも思いますし。

あと、この語り継ぎということなんですけれども、やはり、この教訓を伝えるというのは、なかなか難しいなというのが今、考えていることでして。

教訓を言葉としては知っているんですね。津波がきたら逃げなさいとか。

それは知ってるんですけど、それを言葉としては知ってても、それをいかに行動につなげていくのかというのが、すごく難しいなというふうに思っています。

私、被災者という言葉が好きじゃないんです。

被災者というんですね、なんかテレビの向こうにいる困った人みたいなイメージがあって、なんか自分とは全然違う人だと。

その人たち、可哀想だからみたいな、そういうイメージを持っているんですけど、そういうイメージを持っている限り、なかなか実際、教訓なり災害に対する行動というのは動いていかないだろうと。

よく我が事意識というふうにいわれますけども、自分の問題として、その教訓をどう消化していくのかというのが、その教訓を生かすうえで、すごく重要なんだろうなというふうに思います。

だから今、神戸の災害メモリアルというやつでやったり、その前からやっているのは、いかに…。

まだ幸いなことに神戸には災害の経験をお持ちの方がおられるので、生の声を聞いていただいて、生の言葉を、声を自分でいかに言語化していくのかという。

自分のものとして持っていくということが、すごく重要なだろうと。

そうなったら教訓というのは、本当に生きるんですけど。

学校で、これはこうしなさいというふうに学んだものというのは、なかなか響いてこないのかなというふうにも思います。

それからもう1つ、教訓を…要するに起こったあとの教訓を被災したところに伝えに行くというのも、なかなか難しいなと思ってまして。

多分、宮城の方々も、あのあと、たくさん災害ございましたし、熊本等にも行っていると思うんですけども。

災害を経験したときの自分の大変さというものなんですけど、これ、前の人を経験したことがあるっていうふうに言われると、なんとなくこう、納得ができないとか、こんなに大変なのに、こんなことを知ってるって言われると…というふうな、そういうイメージを、初め持つんじゃないのかなというふうにも思いますし、実際、そういうふう思うんですけども。

ですが、起こることって、やっぱりそんなに実は変わらなくてですね、このごろ学び直しというふうに言おうかなと思うんですけど。

被災したあと、いかに過去の経験を学んでいくのか。

できるだけ早く、その過去を学んでいくのかというのが、先ほど申し上げた命をつなぐで

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

すとか、復興ということの教訓を生かしていくうえで、すごく重要なことなんじゃないのかなというふうに思っております。

○伊東部長 ありがとうございます。

やはり生の声を聞く、あるいは我が事としての意識、それから学び直しということで、お話をいただきました。続きまして重川先生、お願いします。

○重川教授 もう6年半前になりますけれども、東日本大震災で、行方不明の方も合わせると1万八千数百人の方が、主に津波で犠牲になりました。

今、牧先生がお話しされたとおり、命を守るというところで、大変な数の犠牲者が出てしまい、我々、一番いろいろ引き継ぐべきこと、あるいは継承すべきことって、たくさんあると思うんですけども、やっぱり一番しっかりと引き継いでいかなきゃいけないのは、そのところだと思っています。

ご承知のとおり、あのとき津波浸水エリアに約60万人ぐらい、人がいた。

そのうち犠牲になった方が3%ぐらい。

残りの大多数ですね、97%の方は、なんらかの避難行動を取り、自らの命を守ってらっしゃったわけです。

これをですね、私の大学のある静岡に置き換えたときに、不意打ちで津波を伴うような大地震がきたときに、九十何パーセントの人がちゃんと逃げられたらどうか、ちゃんと避難したかどうかということを考えたときにですね、絶対それは、できてないだろうな。

今なら日本全国、皆さん、揺れば逃げる。沿岸部だったら逃げる。

みんな覚えています、不意打ちできたときに、静岡でちゃんと私たち逃げられたらどうか。

どう考えても、東北の方のような避難行動を静岡県民は取ることはできなかったと思っております。

そこで、残念ながら1万8000人の方が犠牲になられたわけですけども、それをですね、あんなにたくさんの方が避難した中で、それでもなお、なぜ3%の方が犠牲とならざるを得なかったのか。

逆に、生き残った96%の方たちは、なぜ自分の命を守ることができたのか。

そういうことを詳しく調べて、数字、データだけでは語れないようなことをですね、やっぱり記録として残していきたいなということで、ずっとその研究も進めているわけです。

ちょっと、その成果をご紹介したいんですけども。フィールドは、宮古市の田老地区です。

今、スライドに出ているとおり、岩手・三陸、特に田老はですね、記憶に残っているだけでも明治の津波。それから昭和8年の三陸津波。

昭和35年のチリ地震津波。そして、昭和43年の十勝沖地震。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—」

昭和54年には防潮堤完成しましたが、6年半前に起きた東日本大震災。

今、生きていらっしゃる方たちの記憶にあるだけでも、これだけ津波に遭遇されています。

その中で、田老地区でたくさんの犠牲者が出た津波というのは昭和8年の三陸地震・津波、これが最後でした。

そのあとも昭和35年、あるいは昭和43年、十勝、起きてますが死者は出ていないんですね。

ということは、東日本大震災が起きるまで80年間、実は死者を伴う津波被害というのは、田老ではありませんでした。

そしてその間、昭和33年、今、写真に出ているような万里の長城と呼ばれている津波防潮堤が、第1堤防が完成いたしました。高さ10m、長さ2.5kmの防潮堤です。

そして更に、その防潮堤の外に家が建ったものですから、昭和54年、更に外側に、第2堤防が造られることになりました。

繰り返しますけれども、田老で死者を伴う津波というのは80年前のものでした。

今まで10人の犠牲者の方に対し、亡くなった方はお話聞けないんですけれども、その方たちと最後まで行動をともにしていた方、あるいは最後まで、直近まで連絡を取っていたご家族の方に直接、その方がなぜ犠牲になってしまったのかという経緯をお聞きするということが続け、これまで10人のご遺族からお話を伺っています。

その中で、白い数字が亡くなった方が住んでいたご自宅です。

それから黄色い数字が、その方が津波で亡くなった場所を示しています。

まずですね、黄色い4番、5番。

海岸近くで亡くなった方が2ケースありますが、この方たちはいずれも消防団員です。

会社の同僚の避難誘導をし、そして、水門閉鎖をし、水門はちゃんと閉めたんですね。

なんです、更に水門の外側に車で避難しようとしていた人がいた。

その人たちを誘導しようとして、津波に巻き込まれたという方が2名です。

職務中の死亡でした。

それ以外の方は実は、いずれもですね、自宅の直近で被災をしているという特徴があります。

避難途中で津波にのまれたという方は1人もいませんでした。

今、お話をしている方全員が田老生まれの田老育ちです。

ほかで生まれ育って津波なんて知りませんでした、よそ者ですという方は1人もいらっしゃいませんでした。

ということで、全員が揺れたら津波、即避難の必要性は十分認識されていました。

なのに、なぜ犠牲になってしまった方と、お話を伺った方はですね、7ケースのうち5ケースは配偶者です。最後まで行動をともにしていた奥さん、もしくは旦那さん。

そして、2ケースはお母様です。その方たちは、お話が聞けた人は生き残っています。

なぜ亡くなったのか、あるいは、なぜ私がお会いすることができた方は生き残れたのか。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

一番大きく書いていたのが、その下に書いてあるものです。

昭和8年、たくさんの犠牲者が出た最後の津波災害を、直接体験した親から避難の必要性を繰り返し聞かされてた。

これが、奥さんは、なんで逃げたのに旦那さんは物を取りに帰ったか、逆のケースもありますが。これが最も大きく影響していることがわかりました。

ただ、それ以外の要因としても、もちろんあります。

例えば、さっき申し上げたとおり、最後に死者が出た津波のあとに万里の長城の防潮堤が築かれました。しかも、三陸鉄道も築かれました。

つまり二重に堤防が築かれ、ずっと行政から二重防災で大丈夫だという話を、ずっと聞かされていた。

あるいは当日、最初に出たのが津波警報で津波高が3m、もしくは4mという情報を聞いていたので、10mの防潮は超えないと思った。

そういう方もたくさんいましたが、しかし、その情報を聞いても更に、いや、逃げると避難行動を取っていたのが今、下に書いてある、死者がたくさん出た津波災害で痛い思いをした、極めて親しい1親等の親族から、あるいは2親等以内の親族から直接話を聞いていたことが非常に大きく作用しているということがわかりました。

津波の継承は生きるのかどうなのか、どうしたら生きるのか。

いろんな条件があって、とても難しいと思うんですけども、こと命っていうことを考えると、極めてシンプルだなというふうに思いました。

つまり、1親等あるいは2親等以内の人が本気で伝える。直接伝える。

このこと以上に有効な継承の方法もなければ、命ということに限って今はお話ししているんですけども。というような気がしているというところです。

○伊東部長 ありがとうございます。

牧先生、それから重川先生からですね、やはり本当に被災した方の生の声、あるいは直接、本気で伝えるということで、お話を聞くということですね、やはり命を守るということにつながるのではないかというお話をいただきました。

それではですね、佐藤先生から、その伝承が機能する、しないというかですね、本当にしっかり伝わるかどうかということについて、何が要因になってくるのかということについて、続けてお話を聞かせていただければと思います。よろしくお願いします。

○佐藤准教授 このお題についてはですね、私のほうからは、住民、地域コミュニティの中での伝承の話と、あと自治体ですね、市町村や県の中での伝承という2種類で分けて考えさせていただきたいと思います。

まず、災害からの避難ということで、地域コミュニティの中での伝承なんですけれども、これは1つ、2つ答えがあるんですが。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

1つは、過去の災害を、その地域の中で振り返る習慣があるかないかというところで、こういった伝承が機能する、機能しないとかが大きく分かれているのではないかなというふうに考えています。

1つは、先ほど岩手の例で紹介しましたが、あれだけの大きな津波がきても、亡くなった方がいなかった地域がいくつかあると。

その共通する特徴としては、津波碑を建てて、それを使って地域で毎年、慰霊祭をしていたという特徴がありました。これは過去の災禍を忘れない取り組みの1つです。

少し場所を変えまして、長崎にいきたいと思います。

長崎の山川河内地区という場所は、江戸時代に大きな大雨が降って土砂災害が発生して、集落の方が大変多く亡くなられた災害がございました。

実はそのあとですね、毎月なんですけども、毎月そのことを忘れない、おまんじゅうを配る行事をされてます。

それが念仏構まんじゅうという行事なんですけども、そういったものをやりました。

ここまでだったらば、すごい継続したね、頑張ったねという話なんですけども、すごいことがあります。1982年に長崎大水害というのが起きます。

また、この同じ場所に大きな雨が降って土砂災害が発生します。

このときに亡くなった方は0名でした。

更にすごいことは、隣の地区では怪我人や死者が出ってしまったということで、こういった行事が、実は被害を減らすということの機能する1つの要因だということをお示ししてくれました。

2つ目は、これ重川先生がおっしゃったことの繰り返しになってしまうんですが、やっぱり親からとか、おじいちゃん、おばあちゃんからということで、3世代で2親等が限界なのかなというふうに考えています。

これは陸前高田でアンケートを取らせていただいて、親戚の中で聞く人の境界みたいなのを聞くと、やっぱり、どうしても上はおじいちゃん、おばあちゃんが限界ですし、下は孫が限界だということで、これを超えることは、なかなか難しいというのがデータでわかったのです。

この3世代2親等の中で、どう伝承を続けていくかということが1つのキーになるというふうに思います。

これが地域コミュニティでの災害からの避難なんですけども、もう1つは行政の中ですね。行政の中で災害からの経験が生きるかという話です。

今日ご登壇されている伊東部長さんの部局なんですけども、震災復興推進課、震災復興・企画部の皆さんと一緒に、宮城県をすでに退職された、かつ東日本大震災の対応を経験された方々、OBの方にインタビューの調査をさせていただいています。

当時どうでしたかということの振り返りをいただいています。

宮城県ってビックリなんですけども、主な災害だけでもこんなにあります。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承－東日本大震災を中心に－」

1978年の宮城沖に始まり、そのあと8.5、9.22という大きな水害がありました。2003年には、北部連続地震と、東日本大震災のちょっと前には岩手・宮城内陸地震ということで、これだけの災害がございます。

実は、このOBの方たちは、この全ての災害の対応を経験しています。

入庁して2年目ですとか3年目ですとか、そういった方たちですね。

その方たちに過去の災害対応の経験は、この震災で生きましたかという直接的な質問をしました。多くの方は、生きませんでしたというふうにおっしゃいました。

これは僕、大変意外な答えだったんですけど。生きてると思ってたので、すごい意外でした。

よくよく聞いてみますと、実は当時と立場が違うんだと。

だんだん皆さん偉くなっていくわけですね。平職員から課長さん、部次長さん。

だんだん職位が変わっていくわけですが、実は、やらなきゃいけないこととか、やらなきゃいけない範囲とか、意思決定の構造が全然違うと。

なので実は、平のころの経験はあまり役立たなかったんだということが共通のご意見でした。ただ、機能する部局というのがあります。それは、土木部局と財務部局でした。

なぜかという、土木は皆さん専門集団なので、やる仕事が比較的、時代が変わっても、そんなに変わらないと。量とスピードが変わるだけの話ですね。

なんで財務が変わらないかという、我が国は災害救助法があって、即ですね、それに基づいて試算をして、これだけお金をくださいっていうやり方は、ほとんど変わってない。

かつ、財務系の部局には特殊なマニュアルもあったそうで、これを使って、きちんと技術が伝承されている。

そういった意味で、仕事が災害の内容とか質によってあまり変わらないものについては生きるんだということがわかってまいりました。私からの考察は以上になります。

○伊東部長　　ありがとうございました。

伝えていくというところでですね、機能するかしないか。

本当に伝えるためにはどうしたらいいかということでお話しいただきましたが、やはり大変難しいことだなということ。

地域で伝えていく、家族で伝えていくこととともに、行政の私たちですね、組織の中でこの伝承ということにも触れていただきまして、本当ありがとうございます。

今、お話しをいただきました、これらも踏まえましてですね、やはり今後この東日本大震災の経験・教訓をどう伝えていくのかということについて、どのようにしていったらいいのか。

重視すべきポイントなどについて具体的なアプローチ、あるいは手法などをご紹介いただければというふうに思っております。

これにつきましては現在、すでにですね、石巻市のほうで実践されている藤間さんから、

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—」

今後に向けてのお話を聞かせていただければと思います。お願いします。

○藤間氏 よろしくお願いたします。

私たち、みらいサポート石巻では、2011年の9月から震災伝承プログラムということで、プログラムをスタートさせております。

現在ですね、6つのプログラムと、そして2つの資料館の運営というのを行ってきています。

ただですね、私たち自身ですね、自分たちの、このプログラムや施設というのが、機能する伝承になっているのかどうかというのは、自分たちでは、なかなか判断ができないというように思っています。

またですね、今ちょっとお話を聞いていてですね、1親等または2親等の方からお話を聞くのが、すごく効果的だというお話を聞いていると、私たちの語り部さんはですね、やはり外から来る人たちにお話をしますので、1親等でも2親等でもないわけですね。

また、資料館で説明をする私や、ほかのスタッフも外から来る人たちにとっては1親等でも2親等でもありません。

そういった意味ではですね、私たちのプログラムや資料館での説明が一体どこまで、来てくださった方々に響いているのかというのは、今お話を聞きながらですね、とても考えさせられるものでもありますし、それを、きちんと伝わったかどうかということが定量的にわかるようなですね、やはり何かこう、手法があったらいいなということも少し思いながら、お話を今、聞いておりました。

それではですね、少し、プログラムのことをご説明いたします。

私たちはですね、ここにあるように、プログラム6つあるうちの今、2つが出てますが、部屋の中での震災の語り部プログラムということと、あと、バスや乗用車に乗っての車中案内というプログラム、大きくこの2つが最初にスタートしたものに…。

すみません、1つ飛ばしましたね、プログラムを。

今、石巻のですね、震災伝承の状況ということで少し書かせていただいております。

先ほど佐藤先生もおっしゃったように、石巻観光ボランティア協会をはじめ多くの団体が石巻では伝承活動を行っております。

その一番下にも、来訪者が急増から減少となっておりますけれども、2013年をピークに減っているという現状があります。

私たちの取り組みとしてはですね、語り部等の震災学習プログラムですとか、資料館での伝承活動などもしております。

私たちの団体だけを見るとですね、なんとか減るのをギリギリ…なんていうんでしょう、現状維持みたいな形でですね、プログラムの参加者または件数というのが今、推移しています。

今年ちょっと難しいかなと、少し減ってしまうかなというふうな思いはありますけれども、

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

それでもなんとか踏ん張っているというところがあります。

その中でプログラムを、いろいろやっておりますので。

こちらにあるように語り部とバス案内とありますけれども、震災の語り部のところというのは、部屋の中でお話を聞いていただきます。

個人的な体験と書いてありますが、特にですね、祖母からの教え。

今、そこに写っている女性の方は、特にですね、1960年にありましたチリ沖津波のことを、おばあさんから、本当に口がすっぱく、耳にたこができるんじゃないかと思うほど、ずっと聞いてたというんですね。

それをですね、思い出して避難をしたというような経験を教えてください方も語り部さんの中にはいらっしやいますし。また、自分の避難行動がですね、いかに失敗だったのか。ギリギリで逃げたけれども、もう一度きたら絶対に逃げ切れないと自分は思っていると。同じ行動をしたらですね。

ってということですか、家族の思いや会社の復旧状況ですか、立場、立場によって、いろいろな個人的な体験をお話しして下さっています。

一方でバス案内というのは、車窓から見える風景ですね、というのを現場を見ながらお話をするというので個人的な体験ではないわけなんです。

これは、どちらかでも構いませんし、どちらもセットにしても申し込まれてくださる方がいます。

この防災まちあるきというのが今、いろいろな方々がすごく受けてくださるプログラムでもあります。

アプリを使った東北初のまちあるきプログラムだというふうにかかれておりますけれども、石巻津波伝承ARアプリというのを作っています。

これは皆さんの今、持っているスマホなどにも無料でダウンロードができますので、ぜひ今、スマホを出してですね、ちょっといじっていただけたら、とてもうれしいなと思えますが。

過去、現在、未来という写真が入っていたり、石巻に来ていただくんですね、その津波の浸水高がわかったり、またですね、被災した人の声が入っていたりというようなアプリです。

これをアプリで、ご自身で回ってもいいんですが、プラスアルファの情報を話しながら私たちと一緒にご案内するというプログラムにもなっております。

防災まちあるきの感想なんですけれども、もう一度クリックお願いします。

アプリでですね、まちあるきによる追体験ということで、震災や津波の大きさを肌で感じましたとか、いろいろなご意見をいただいて、少しでも自分で想像ができましたというようなことですか。

また、復興が進んでいる姿に感動しましたとか、いろいろなご意見とかをいただいています。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

今、写真に写っている子も小学生とか、また、未就学児の子も受けてくださることがあるんですが、未就学児の子がですね、以前言った言葉がすごく印象的。

津波の浸水高がわかるボタンをクリックしたときにですね、やばいって言ったんです、ひと言。すごいと思いませんか？未就学児が、やばいと言ったんです。

やばい、パパより高いじゃん、背がって言ったんですね、その津波の高さを見て。

その感覚というのは、すごいなと思って。

こういった目で見える、そういったアプリというのも1つ、大きくプログラムとして大事だなと思っています。

参加者のアンケートではですね、そのアプリもよかったんだけど、案内ガイドさんの案内も、とってもよかったんですということもいただいておりますので、いわゆるコンテンツだけがいいわけではなくて、やはりそこには、どこまでいっても人が大事なんだなということも感じています。

もう1つですね、私たちは語り部と歩く3. 11という、違う歩くプログラムもやっております。

これは200名ぐらいまで一度に受けて、修学旅行など大型の学校さんなんかも受け入れるんですけども。

20人に1人の語り部さんがついて、語り部さんが当時、逃げた道ですとか、避難をしていた場所の近くでお話を聞くようなプログラムになっています。

基本的に一度受けてくださった学校さんは、翌年からリピーターに、ほとんどなってくださってるという現状もあるので、学校の先生たちや生徒さんたちには、ある程度感じてもらえてるところがあるのかなと思っています。出張語り部ということもやっております。

外に出て皆さんのもとに伺うということですけども、出張語り部をですね、自分たちの防災訓練の中に組み入れるという方たちもいますし、事前学習として呼んでくださって、そして、石巻に来て学習して。

そして、振り返り会ということで、質問、疑問など、あるものを記憶が鮮明なうちに、当日のうちにですね、質問を聞いて、事後学習に生かすというような、そういった流れも起きております。

私たちは先ほど、資料館を運営しているというお話をしました。

祈念公園整備を見据えた南浜つなぐ館の拡張となっておりますが、石巻にはですね、1700から1800世帯の4700～4800人の方がお住まいだった南浜地区という大きな住宅街が津波によって流失してしまっております。

そこにですね、2020年までに国と県と市が祈念公園、祈る念じる公園と書いて「きねんこうえん」と読みますが、それを造る予定に、整備予定になっています。

そこにはですね、市民による伝承活動の場というのが、公園ができる前から活動してもいいですよということで用意されていて、そこでですね、私たちは資料館の運営というのを行っています。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承ー東日本大震災を中心にー」

今年の7月の末にですね、大きくしまして、シアタールームですとか、また、地域の方たちが集えるような部屋の整備なんかもしております。

年間、約ですね、2つの資料館合わせて約2万人くらいの方たちが来てくださっているところでもあります。

今、シアタールームをとこのを整備しましたけれども、こういった形ですね、大きくスクリーンを出せるような形で自分たちが作った映像ですとかを流しています。

その南浜つなぐ館ではですね、ICTを活用した伝承コンテンツの作成ということで、今、VRグラスというのはゲームの世界などでも多く、すごく有名になっていますけれども、震災遺構として残るですね、石巻の門脇小学校の当時の震災直後のですね、様子ですとか教室の中などがVRグラスで360度見れる展示ですとか、またですね、この遺構として残る門脇小学校というのは、このままの姿で残すわけではないんだということが今年の3月に市から発表されました。

そういったこともあってですね、一部が壊されてしまうということもありまして、ドローンを使って3Dモデルにチャレンジして今、数年後に形が変わってしまうであろうものを、かつてこういう状態だったんだということを残しています。

これは、ちょっと違う街なかのほうに移ってますけれども、そういった活動もしております。

先ほども少しお話ししましたけれども、震災支援の連携から震災伝承の連携へということで今、私たちは活動のフェーズが変わっております。

今、左上にですね、震災学習協働体制構築コンファレンスというふうに書かれていますけれども、今、隣に座ってくださっている佐藤翔輔先生にも全面的に協力をいただきまして、私たち今、石巻、または周辺の東松島、女川という地域の方たちが集まりながらですね、震災伝承に関して連携ですとか、ということを取り組みを行っています。

その中でですね、2015年の12月から、このコンファレンスは始まっていて、先日15回目が終わっているんですけども、メンバーとしては行政、民間研究者など、どなたでも自由参加で行っています。

このコンファレンスで、中越や神戸、岩手などに視察なども行っていたり、佐藤先生のご協力のもと、12の基本方針を作成して、どこから私たちは取り組んでいこうかというような話し合いなどもしています。

テキストを作成したり、自分たちからできることを具体化、共有などを行っている、そういったコンファレンスを行っています。

このコンファレンスを行う中でですね、その15回目の先日…。

各地の伝承活動の連携、必要なんじゃないかということでですね、3.11メモリアルネットワークという構想の話し合いをいたしました。

これはですね、宮城県の地図を横にしてしまっているの少し見づらいかもしれませんが、縦に見ていただくとですね、南は山元町、北は気仙沼まで、各地方でですね、この宮城県

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

には、先ほどの門脇小学校ではないですけども、遺構ですとか、またですね、取り組んでいる公園などが、メモリアル公園などができます。

私たち石巻市だけがですね、頑張っている、お客様というのは、いろんな市区町村を渡り歩いて、いろんなですね、メモリアル施設を見たり、震災のプログラムを受けたりなどしながら動いています。

その中で自分たちだけで何かですね、共有とかをするのではなくて、よりよいプログラムを作るためには、市区町村をまたいでプログラムを考えたりですとか、また、これから若い世代の人たちを育てるといようなことを考えたりですとかしていかなければいけないのではないかという観点から、民間でですね、まずは立ち上げということで3. 11メモリアルネットワークというものを立ち上げました。

まだですね、12月の頭に役員さんが決まるようなことがありますので、まだまだスタートして間もないものになりますけれども、ぜひ、この中にいらっしゃる方たちの中にもですね、ご興味がある方がいらっしゃいましたら、私たち、みらいサポート石巻が事務局を担当いたしますので、インターネットでですね、電話番号を調べていただいて、お電話いただけたらなと思っております。以上になります。最後に、すみません。

最後にですね、もう1つだけお伝えしたいのが、これだけコンテンツですとかをやっている、最後は、やっぱり人なんだと思うんです。

私たち、プログラムに参加するときには電話ないしはメールできます。

そこから実は始まっていると私はいつも思っていて、そこでですね、変な話ですけども、とても電話口調が慇懃無礼だったりとかですね、したら、すごく石巻、なんか、いやだなとか思いながら来てもらうかもしれません。

そういう思いになりながら語り部さんの話を聞いたら、少しですね、うがった見方をですね、するような気持ちのまま聞かれてしまうかもしれません。

そういうふうにはしたくないので、電話の最初のやり取りから、震災伝承というのはスタートしているんじゃないかと私は、いつも思っています。

なので、会場も写真ですとかを、たくさん飾っているうちの資料館でなるべくやりたい。

そうしたほうが、やはり集中力も増します。

また、語り部さんにとってもですね、語り部さんだけが話すわけではなくてですね、そこには、やっぱりサポート役の私たち司会などをやる人間が必要なんだとも思っています。

語り部さんが自分たちの体験を純粹に話すためには、どうしてもアップデートをしていかなければいけない、いろいろな情報があるわけなんですけど、それをですね、いちいち勉強していたら大変なわけなんです。

自分たちが失敗してしまったことですか、そういったことを伝えたいのに、変な話ですけども、今、防潮堤の高さがですね、7. 2mの防潮堤をこの辺では造ろうとしているとか、計画が変わってですね、また数値が変わったとか出来上がる日付が変わったとかですね、そんなことを追ってたら大変なわけです。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—」

なので、そういったところは全部、事務局である私たちが引き受けて、司会をやっている私たちが引き受けて、語り部さんたちには純粹に話してもらおう。そういった二人三脚。

または、お客様ですね、お酒を飲んできたらですね、伝えたくても伝わらないので、お客さんも、それなりに…それなりにっていうか、お客さんもきちんと聞いてもらえるような、そういった雰囲気作り。

変な話ですけど、お客さんと、語り部と、私たち事務局の3つの三本柱ですね、震災伝承というはやっていくべきなんじゃないかなと今、すごく思っています。

ありがとうございます。

○伊東部長 ありがとうございます。

ICTなども使いながらですね、いろいろ伝承、みらいサポート石巻の具体的な取り組みの内容についてお話いただきました。人が大事ということと、あとネットワークですね。

これからのネットワークということにも触れていただきました。

それでは、続きましてトリシア先生にお話をお伺いしたいと思います。

よろしく願います。

○トリシア教授 ありがとうございます。パネリストの皆様からも大変、有意義で心温まる、思慮深いお話をいただきまして、どうもありがとうございました。通訳者の方が通訳しやすくするため、引き続き少しゆっくりにお話ししたいと思います。さて、私たちの日本における活動、特に福島県でどのようなことを行っているのかについて、もう少しお話をしたいと思います。我々は、被災者がどのように復興の過程を理解するのか、ということに非常に興味を持っています。

この研究は、並木有希さん及び東京家政大学と共に行ったものであり、そしてフィラデルフィアのコレッテ・フーさんにもご協力いただきました。私たちは、復興について、定性的調査及び定量的調査の両方を十分に行ってきました。長年に渡り、文献がどう復興を定義してきたのか、そしてそれがどのように変化してきたのか、政府や民間の政策立案者がどのように復興を定義しているか、災害後の復興プロセスの中で、どういった指標を設定してきたのか等。

復興の指標の多くは、復興の物質的な面や経済的な面に関わっていません。ですから、例えばどのように住宅を再建するか、どれぐらい早く再建できるか、といったことに着目するかもしれません。また、世帯収入や就業率が災害前の標準に戻るかどうか、といったことに着目するかもしれません。これらは、政府、災害研究者の両方にとって、よくあるテーマです。この数年では、他の二つの領域についての研究をよく目にするようになりました。

環境面の復興ということになれば、土壌や大気の状態への影響に着目し、さらに言えば、そ

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

れが災害前のレベルに戻ったのか、もしそうではないならば、まずは安全なレベルになったのか、ということから研究が始まります。また、生活や福祉、社会的な復興ということになれば、コミュニティの中に、どの程度、慢性的なトラウマ症状が残っているのか、コミュニティ機能が災害前のレベルに戻っているのか、などに着目するかもしれません。学校は再開しているか？子供達は学校に来ているか？病院は再開しているか？これらは、コミュニティが取っている戦略や、これらの目標の達成に向けた進捗状況はどうかということを見ていくときのポイントとなります。

最近の多くの研究から分かることは、コミュニティによって復興の定義は異なるということです。しかし、それらには、以前そこにあったものに戻すという共通の性質があり、ときには、前に進むためにコミュニティにとってより良い姿を目標とする場合もあります。我々の研究は、少し異なります。人々が、この復興という概念をどのように理解しているのかを知りたかったのです。被災者達は、これらの指標を自分なりにどう定義しているのでしょうか。これらの指標が正しいか正しくないかということではなく、彼らが災害を乗り越える過程で、復興をどう捉えるのかを理解したかったのです。私たちのアプローチを理解していただくため、2つの事例をご紹介します。とても簡単に説明させていただきます。

まず、福島県でのこの事例は、阿部さんという女性についてです。阿部さんは梨農家で、非常に精力的に、この梨園で働いていました。この梨園は福島市内にあり、2011年の震災でフェンスや自宅に被害を受けましたが、そのほとんどはすぐに修復できました。しかし、彼らは農家ですので、放射線について非常に心配していました。2013年と2014年に、私は阿部さんにお会いし、彼女にとって復興とは何を意味するのか聞いてみました。彼女は、たくさんのお話をしてくれました。例えば、土の状態が安全なレベルに戻っているかどうか。実は、戻ってはいたのです。また、農作物や梨がお客様にとって食べても安全なものなのか、ということもおっしゃいました。私が彼女にお会いしたときには、本当にこれらの作物もまた、安全なレベルだったのです。しかし阿部さんは、これらのことを、復興しているというふうには捉えていなかったのです。彼女は、原子力発電所の廃炉について話しましたが、それすらも十分ではない、と。彼女は、梨園を歩き周りながら、土の上のひび割れや影等を見て、とても心配そうにしていました。表面の土は、取り除かれ、実はこの梨園の真ん中に埋められました。もちろん今でも、その場所に作物を植えることはできません。そして話し終えた後、私は、彼女の夫の家族が何世代にも渡り守り続けてきた土地に対する献身や、彼女が子供達や孫達に対して感じている心配について考えていました。ですから、阿部さんにとって、復興というのは、説明が非常に難しいものであるということがわかりました。

阿部さんは、こういった言葉は使わなかったのですが、例えば安全と安心という言葉。これら2つは明確に違います。阿部さんにとって、色んな意味で「安全」は達成されているわけです。住んでいるところの放射線のレベルも安全なレベルになっており、農作物も売

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

っても大丈夫なレベルになっているわけですが、しかし「安心」という気持ちになれないのです。しかし、誰かが咳をしたり血を出したり、どこか体の調子が悪くなったり、どこか地面の状態がおかしくなっていたり、ということだけでも、原発の影響ではないかと心配になってしまいます。それを頭から払いのけることができないとおっしゃっていました。

というわけで、私たちが書くことができる記事というのは、論文やレポートというよりは、彼女の状況を表現するアートを創り出すようなものなのです。つまり、阿部さんが梨園を歩いて感じていた幸せ、土の上を歩き回るときに感じる心配、梨園のことを考えていないようなときにも意識の奥底にある放射線や原発、消費者、子ども、孫、それから祖先のこと。そして、ガイガーカウンターが安全な数字だったとしても、地面の下に放射性物質が残っているのではないかということが、いつも阿部さんの頭にあるわけです。ですから、たった1人の事例ですけれども、復興という言葉には、たくさんの層が、例えば、阿部さんの例ですけど、あるということが、これでわかると思います。

皆さんにご紹介したいもう一つの例は、市沢さん夫妻です。飯舘村の方です。飯舘村には放射能の影響があり、最終的には避難を選択されました。彼らは、飯舘村でこの有機栽培のコーヒーショップを営んでおり、避難を決断するには時間が必要でした。結局は福島に引っ越し、またコーヒーショップを開きました。このコーヒーショップですが、そのままの建物で、構造で、飯舘村に残っているわけです。そして、福島で2013年、2014年に別のコーヒーショップを借りて、そして、自分の店を福島で持つようになりました。ご主人は、ぜひ飯舘村に戻りたいと思っていました。飯舘村では、除染のために表土を全部はがすとか、引っ越すのかどうかということ、多くの人が迷っていたわけですけれども、ご主人は、ぜひ戻りたいと感じていました。何世代も暮らしたところですし、祖先のお墓もあるということでした。そして、あの飯舘の土地が、自分のDNAにあるんだと言っていました。そして、土地や家だけでなく、コミュニティも復興させたいと言っていました。でも、奥様にとっては、状況は非常に異なります。この土地や家は、ご主人の家族のものであり、彼女は引っ越してきただけなのです。ご主人が持つような愛着は、奥様のほうにはないわけです。彼女にとっての家とは、自分たちがいる場所なのです。奥様は、事業者として、とても成功していました。ケーキやコーヒーにプライドを持っていました。彼女は、息子にとって、その土地を相続するということが何を意味するのか、非常に心配していました。孫が訪ねてきてくれないのでは、とも。奥様は、前を向いていて、前へ進もうとしていました。同じ世帯の中でも、夫婦で意見が異なっており、今後についてこのような話し合いを始めていました。

震災後にコミュニティの中で行われた調査では、このように世帯の中の一人だけがアンケートに答えるということがよくありましたが、多くの場合、男性であったことは想像できると思います。このように、互いに思い合う二人の家族が、強い絆があるにも関わらず、今後の生き方や復興がどういう意味を持つかということについて、非常に異なる感覚を持っているのです。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

このように表現してみました。ご主人の方は、この祖先の土地へ、自宅へ戻りたい。一方で奥様の方は、今の福島での、このお店に、ケーキに集中して、前を向いて、彼らがそのときに居る場所のことを考えていたい。すなわち両方が、一家の人でも全然別の方向を見ている、別の展望を持っていることがわかります。

ということで、ここから何が教訓として学べるでしょうか。まず、教訓というのは必ずしも客観的ではないということです。社会学者から見て、客観的な尺度、ベンチマークも重要であるとは思っておりますけれども。しかし、この教訓というのが、それぞれ個人が持つ違った関心、視点、経験を反映しているわけです。そして、災害からの復興状況の目安というのは、非常に、例えば阿部さんのように個人の中でも葛藤に満ちて定めることができないし、あるいは市沢さんのように一家の中でも異なっており、公的な指標を設定するのは、非常に難しく、慎重さが必要だということです。

○伊東部長 ありがとうございます。

本当に、どうしても、経験・教訓というのが、みんな同じだというふうに思いながら進めていきがちかなというふうに思うんですけど、やはり、本当にそれぞれの方の思い、それぞれの経験が違うという中で、共有したりですね、伝承していくっていうのは、とても難しいことなんだなということを今、感じているところでございます。

それでは、続きましてですね、佐藤先生、お願いします。

○佐藤准教授 ここではいただいているお題は、東日本大震災をはじめ、ほかの災害を含めですけども、それを継続的に伝承させるために必要な要素は何かということなんですけれども、さっきですね、災害からの避難の話と、行政の中の災害対応のノウハウについて、こういうことがあるといいよということで、何をすればいいかというのは、だんだん、わかってきたという段階なんですけども、実はこの質問というか、お題がですね、私、正直お手上げでございまして。

実際に何をやればいいのかというのは、まあまあ、わかってきたんですけども、それをどうやって立ち上げて、どうやって継続するかってことの問題には、まだ解決の答えが出ていないというのが、正直な降参の発言でございまして。

先ほど、災害からの避難という話では、家や地域で過去に受けた災害を忘れないという習慣を作ることなんですけれども、やっぱり、地域でああいうことができるという、すごいずば抜けたリーダーがいるとか、ある程度の、若干のお金があつたりとか、いろんな機会が織り交ざって、ああいった慰霊祭とか、おまんじゅう配りとかが実現していると思うんですけども、それがどうやったら、どこでも立ち上がって、どうやったら、どこでも継続できるかってことの仕組みというか、要素は、正直まだわかっていません。

あと、もう1個、行政の話なんですけども、実は、東日本大震災の被災市町を見て、よくわかるのが、かなり早い段階で、兵庫の職員さん、神戸の職員さんが駆けつけてきてくれ

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

ると。

その駆けつけてきた方は、必ずしも、二十数年前の阪神・淡路大震災を経験した人ではなくて、経験してない人も、私たち、知見持ってきましたってことで、そういった顔で来るらしいんですけども、そういう、なんというんでしょうか、情熱ですね。

自身が経験してなくても、そういった体というか、そういった意気込みで来ていただけるというのが、今回の東日本大震災で、よくわかりました。

そういった意味で、こういう情熱とかパッションとか勢いを、この宮城県とか岩手県や福島が、これからどうやって持っていくかということの、じゃあ、そのパッションを持つためにはどうしたらいいんだということ、これから一生懸命、考えていかなければいけないということで、ちょっと、このお題についてはですね、まだ、どうやったらいいかというのがわからないという、降参の発言で終わらせていただきたいと思います。以上でございます。

○伊東部長 ありがとうございます。それでは、重川先生お願いします。

○重川教授 今、佐藤翔輔先生がおっしゃった、まさにそのとおり。

立ち上げはできても、どうやって継続をしていくか。

私は、今からご紹介するのは、その試みを今やりつつある、あるいは十何年間か、そのやり方で、なんとかここまで続いてきたっていう例を、ちょっとご紹介したいなと思うんですが、今日お話に出てるように、伝えていくということ考えたときに、形のあるもので継承していくということと、形のないもので継承していく。

特に、形のないものを共有・継承していくためにはということ考えたときにですね、実は、Team Sendaiという組織があります。

震災が、3.11が起きる少し前に、仙台市役所の有志の職員たちが中心となって立ち上げた、自主的な勉強会とか、政策提案とかを行う、割と若い職員の方たちが中心の組織でした。

この方たちが、3.11から少し経って、なんとか自分たちが経験したことを記録に取っておかなきゃいけないんじゃないかということで、活動を始められました。

そんな中で、私たちもずっと研究に詳細な記録を取り、共有するっていうことを目的とした、エスノグラフィー調査研究というのをやっていて、声をかけていただきました。

じゃあ、ぜひ、仙台の記録は、外部のよそ者の我々が取り、残すのではなく、仙台市の方たちが、きちんと取り、きちんと残し、そして、若い職員の方に共有していく。

やっぱり、そういう仕組みにしておくことが、一番大切なんじゃないかなという気持ちから、この1年間、一緒に活動を続けてまいりました。まず1つ目は、記録を取る。

これは、仙台市の中でも、なんといっても政令市ですから、たくさんの職員の方がおり、さまざまな業務に就いていらっしゃるんですが、神戸のときから含めて、自治体として非常

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

に重要な、プライオリティーの高い災害対応業務に、主役として携わってきた職員の方を選んでいただき…。これは、仙台市の方でなければできないんですね。

インタビューは我々のほうで行っています。それを、文字起こしし、今後、どうしていきたいかという、インタビュー記録をですね、全部、文字に起こします。

それを、ここに書いてあるように、文章を何も加えない。何も変えない。

ただ削るだけで、どんどん短くしていき、10ページぐらい、あるいは20ページぐらいのテキストにしたうえで、今、見ていただいているように、それを読んでいただきながら、現場の知恵や工夫をみんなで話し合ってもらおう。

現場にいた人の目線で情報を共有してもらおうということを、今後、やっていきたいというふうに思っています。

ただ、そのときにですね、記録を残すのが、実はとても大変でして。

デジタルデータの危うさ、もろさということを、やっぱり念頭に置いておかないと、デジカメとかボイスレコーダーとか、USBとかDVDが、何十年後まで使えるかわからないです。

結局、私たちが過去の情報を見るっていったら、和紙に墨書きとか、皮に消えないようなインクで書いたり、そういう記録はともかく、デジタル情報というのは非常に危ういものですので、そういう意味で、時代が変わっても残る形で、バックアップをとっておく。

例えば、ISBNをつけて、国会図書館に1部は必ず寄贈しておけば、世界中から検索していただけるとか、そういうことを考えながらやっています。

そして来年になれば、Team Sendaiの方たち、仙台市役所の方が主体となって、例えば、仙台市での記録はご自分たちで取り、ご自分たちで整理し、ご自分たちの宝としてストックをし、引き継いでいただけるようになるのではないかと思います。

もう1つの残し方は、これは今年でもう13年続いています、2004年に起きた中越大地震の被災した自治体の職員、それから、そのときに応援活動に行った職員の方たちから、この被災現場でやった経験を、このまま人事異動でバラバラにするのは、あまりにももったいないね。

じゃあ、どうやったら継続していけるんだろうかということで、ネットワークおぢやという任意の団体を作りました。設立の目的は、ここに書いてあるとおりです。

具体的にどういうことをやっているかといったら、実際にどこかで災害が起きたときに、過去の災害を経験した、あるいは、被災地を応援したことで、災害対応業務を疑似体験した方たちが、被災地に行き、応援活動を行う。

それから、年に何回かは、必ずメンバーが集まって研修会を行う。情報共有をする。

そういうことを13年間、続けてきました。

ですから今、約80の自治体の方が、年会費1万円、公費で会員になってくださっています。

ここに書いてあるような災害に、実際に出向き、熊本地震にも応援に行きました。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

そこで応援活動した人は、阪神大震災は知らなくても、熊本地震で実際に現場でのトレーニングを積んだ方たちですから、その方たちが、また次の災害が起きたら被災地に行って、アドバイスをします。

メンバー自治体の方が被災したら、無条件で、1か月無償で応援をするというルールでやっています。

私たちが中心にやっているのは、物で残すではなく、人から人へ継承していくということなんです、ここに書いてあるとおり、さっき佐藤先生もおっしゃったとおりです。

熱い気持ちがどんどん薄れていく。

当事者だった人がリタイアすれば、どんなに引き継いだとしても、同じ気持ちでやっていただけるかどうか、非常に難しいです。

それと人事異動、世代交代、この溝を乗り越えるための仕組みを作っていかなきゃいけない。

なんとか13年間、中越大震災ネットワークおぢやは、やってきました。

それから、Team Sendaiを中心とした、仙台市での継承活動というのは、まさに1年目を終了するところで、これからどういうふうに展開していくのか、またみんなで知恵を絞りながら、やっていかなきゃいけないと日々、悩みながら走っている今日この頃です。

○伊東部長 ありがとうございます。それでは牧先生、お願いします。

○牧教授 先ほどでしたっけ、佐藤先生のやつで、兵庫県とか神戸市の人はなんであんなにパッションがあるのか。

関西人ですから、あつかましいというのもあるんですけど、もう少しまじめな話で言うと、先ほどの重川先生の中越もそうなんですけど、いつも皆さんおっしゃってて、涙が出るのは、助けてもらったお返しができてないっておっしゃるんですね。

だから、自分とこ助けてもらったけど、そこにお返しができないので、ほかに助けに行くっていう反応は、すごいなというふうに思うんですけど、そういう助けてもらったことをなんとかっていうのが、1つあるのかなというふうに思いますが。

伝承を有効に機能させるための試みということですけども、まずは記録するということが1つ、すごく重要だろうというふうに思います。

ぜひなんですけども、大変な災害で命を失ったお話ですとか、避難所のお話というものの記録は、すごくあるんですけど、この災害復興の記録、本当にご苦労されている記録というのが、実は、なかなかない。本当に10年もかかる、今で、もう6年ですから、まだ終わらない。

この大変な記録というのは、ぜひ記録をしていくというのは、もう1つ、すごく重要なことなんだろうなど。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—」

だから、まだ災害の記録というのは、どんどんと今後も継続していかないといけないというのが、重要なことかなというふうに思います。それから2つ目、保存する。

保存していくというのは、すごく実は大変なことで、人と防災未来センターというところに、先ほどの阪神・淡路大震災の資料が、一次資料、要するに生資料が19万点。

それから二次資料という形で、これは書籍等々ですが、4万点あるんですが、これを管理するのに、専任というか、週に何回か来られる資料専門員というのを3人、雇用して、今もずっと保存というか整理を続けてます。

というので、22年経っても、実はまだ整理が終わっておりませんで、その中で今、一番重要で、これはぜひ東北でというふうに思うのは、資料の公開ということで、受け付けるときにですね、人と防災未来センター、一任。

一任ということは、要するに、こっちがだめだと思ったら出さないし、こっちが大丈夫だと思ったら出すというやつと、もう1つ、そのつど相談。

これは、借りに来たときに、見せてもいいですか？見せてもよくないですか？と。

多分、預けられる方は、そのとき決められないので、一任というのはちょっと怖いなというので相談なんですけど、これが実は、なかなか大変でして。

まだ今、昨年の数字だったと思うんですが、3万点ぐらい、一任されていない資料。

毎年、実はそれに電話をするんです。

ところが、だんだんと、実は連絡が、20年も経ちますので、つかないところがあって、そうすると、やはり見せられないんです。あるのはあるんですが。

ですから、いろいろお話を聞いていると、忙しくて、なかなかそこまで手が回らないということ、こちらでも、よくお伺いするんですけど。

やはり、一任をしていただく、公開をしてもいいというふうにしていただくという努力は、早めにしないと、本当に、だんだんと大変なことになるなど。

これ、じゃあ、そのあとどうなるのかというと、何十年かしたらまた大丈夫みたいですが、それじゃあ、やはり資料の命、有効性というのがなくなるんだろうなと思います。

3点目が、活用するというので。

2つ、事例をお話しようと思いますが、先ほど、一番初めに申し上げましたように、災害メモリアルうにやうにやというのを、神戸では20年、今で22年目、つながってきてます。

毎年1月の17日前後にやるんですが、初めの10年というのは、メモリアル・コンファレンス・イン神戸ということで、この災害の復興というのは、いろんな分野の方が、行政だったりNPOだったり、大学の先生だったり市民の方だったり、いろいろ活躍されるんですが、お互いの活動がよく見えてないので、それを共有しようというのが、初めの10年。

その次の10年というのは、やはりこちらでも、先ほど風化という言葉が出ましたが、いかに、この経験を若い世代に引き継いでいくのかというのが、次の10年。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

次の10年で1つキーワードになったのが、震災体験の語り部さんって、先ほども見てたんですけど、結構お年を召された方が多くて、でも、聞きに来るのは高校生、中学生で、どうも、このところ、うまくつながってないんじゃないかというのが1つのキーワードで。そのときにやったのは、やはり大人の目じゃなくて、子どもの目を見た震災というのを高校生に伝えないと、あれは大人の経験なんだということでは、なかなかうまくいかなくて、それで、ユース語り部というような、そういう高校生の方が自分の小学生だったときの経験を語るみたいな試みが出てきたんですけども、どうすれば伝わるのかというときに、やはり、体験したときの立場の違い。

先ほど、行政で立場が違えばって言ったけど、子どもが大人の話、聞いて、ほんまに通じてたのかというのが、1つ課題になります。30年まで本当にやるんですけど、気の長い話で。

今度はアクションということで、本当に経験を持っている若い人たちがいなくなるので、その方たちが、神戸の言葉というふうに呼んでいるんですが、いろいろ直接聞いて、それを自分たちの言葉に直したうえで発信するみたいな活動を、30年ですので、非常に長い活動をしているということと。

最後、やはり20年も経つと、物の力というのはすごくて、いろいろ収蔵している資料をどう使っていこうか、伝承にということで、このホームページ、実は先月、開いたんですけど、収蔵資料を使って、いかに次世代に、その経験を伝えていくのかというのを、「震災資料語り」と書いて「ものがたり」というホームページが、防災未来センターに出ていますので、また見ていただいたらというふうに思います。

ということで、実は、物にもすごい思いがあって、お母さんが、息子さんが…なんのお仕事をされていたのか忘れましたが、使ってたワープロをずっとお持ちになってて。

私から見たら古いワープロなんですけど、そのワープロには、すごい、いろんな思いがある。

そういう、物が持ってきた物語が持つ力というのはすごくて、なかなか生では、もう神戸では、物は残っていませんが、こういうものが持ってきたストーリーというのをを使って、皆さんに伝えていくというのも、すごく重要なことというふうに思います。

○伊東部長　　ありがとうございました。

本当に、お一人お一人、1時間、2時間、本当お話しただければということで、ちょっと、お約束していた時間、過ぎておりますけれども、せっかくの機会ですので、最後に本当、ひと言ずつ、皆さんに向けて、あるいは、これから伝承に取り組もうという人に向けてのエールという形で、ひと言ずつ、お話を最後、聞かせていただければと思います。

じゃあ、牧先生のほうから、お願いします。

○牧教授　　じゃあ、ふた言だけ…ふた言、申し上げます。

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

1つは、ぜひ、南海トラフ地震の被災地の方に、東北の、落ち着いたらでいいんですが、大変だった経験というのを、やはり生の言葉というのが一番伝わりますので、伝えていただきたいなというふうに思うのと、2つ目は、もう1つ、伝承、伝承っていうときに、まだ、しゃべれない人がたくさんいるんだということを、忘れてはいけないんだと。

神戸、20年なんですけど、まだしゃべれない。

しゃべり出したら、ずっとしゃべって泣いてしまうという方は、20年経ってもおられませんので、しゃべれるようになったらしゃべるとというのが、もう1つ、すごく重要だというふうに思います。

○伊東部長 ありがとうございます。

○重川教授 先ほど、1親等、もしくは2親等から言われなきゃ逃げないって言いましたけど、私は、親も、その上も、災害で大きな被害を受けたという経験、ありません。

聞いたこともないです。でも、私は逃げます。

なぜかっていうと、やっぱり、今までいろんな被災地で、たくさんの方から、いろんなことを教えていただいたり、さまざまな仕事、研究に関わって、こういう防災に関わる情報に直接、触れてきました。

何が言いたいかというと、皆さんが取り組んでらっしゃる災害の継承、伝承というのも、1つの方法で、これが決め手だというのはないと思うんです。

いろんなものが組み合わさって、いろんな組織とか、いろんなイベントとかが、やっぱり、連携して、なるべくたくさんの情報を1人の人が得られるように、そういうネットワーク、連携っていうのが、すごく大事なんじゃないかなと。

そういうことが、これから時間をかけて実現していくことによって、実際に直接見たり聞いたりしなくても、やっぱり、必要な情報、知識を高めることができ、自分の命を守る、あるいは災害に備えるために何をすべきかを、賢く考えられる人づくりができるんじゃないかなというふうに今日、皆さんのお話を伺いながら思いました。

○伊東部長 佐藤先生、お願いします。

○佐藤准教授 ちょっと時間がないので、1つだけ話させていただきます。

実は、途中で宮城県のOBの方にお話を聞いているという発言をしましたがけれども、そのOBの方のご発言の1つなんですけど、東の宮城になろうというふうにおっしゃいました。宮城って東にあるから、東の宮城って普通じゃないかなというふうに思うんですけれども。それは、西の兵庫、西の神戸という言葉の対照でございます。

要は、災害対応とか復興といえば、やっぱり今、兵庫、神戸だと。

そういった意味で、今回のことに関しては、東の、その方は県の方なので宮城とおっしゃ

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承—東日本大震災を中心に—

いましたけども、東の東北というふうに、胸を張って言えるようになるとういうふうにおっしゃっていただきました。

私たち今、走りながら皆さんと一緒に考えている状態でございますので、引き続きまして、皆さんとともに、そういった形になれるように頑張っていきたいというふうに思います。以上でございます。ありがとうございました。

○伊東部長　　ありがとうございました。それではトリシア先生、お願いします。

○トリシア教授　　それでは私、最後に一つだけポイントを申し上げたいのですが、このように、災害で得た教訓や、我々の被災経験をどのようにして新しい形で伝承していくのか、前進をしていくのか、について考えるとき、工学、社会科学、政策科学だけではなく、芸術や人文科学、そしてコミュニティも一緒に学際的な研究に関わってもらうことが重要になります。

本日、パネリストの方々から宮城県、あるいはほかの被災地での状況についてのお話を伺い、非常に勇気をいただきました。

○伊東部長　　ありがとうございました。それでは藤間さん、お願いします。

○藤間氏　　私たちはプログラム、コンテンツを作っている人間として、先ほど牧先生がおっしゃったように、いつ、しゃべれるようになるかわからない。

そういった、しゃべれるようになった人たちを、やっぱり、いつでも受け入れるということを、私たちはしていかなければいけないと思いますし、また、先ほど先生たちが、続けていくことが大事だということをおっしゃっていましたが、どうやったら、自分たちの活動、ネットワークを通して、続けていけるのかと考えながら、また、作っているコンテンツが、常に、これでいいのかどうかということを、自分たちにも疑問を持ちながらですね、変えていける柔軟さみたいなものですかね。

プログラムをよりよくするために変えていたり、展示をよりよくするために変えていく柔軟さみたいなものを失わないように、続けていけたらなというふうに思っております。ありがとうございました。

○伊東部長　　ありがとうございました。

本当に、さまざまな事例、あるいは考え方をご提示いただきまして本当、ありがとうございました。

私が最後にひと言でまとめるなんていうのは、とてもとてもということで、やっぱり、本当に伝えていくというのはとても難しいことなんだなというのを改めて感じましたし、た

2017年11月26日(日)

「世界防災フォーラム本体会議 PM3

被災地からの経験・教訓の共有と継承ー東日本大震災を中心にー」

そうですね、やはり、ここでしっかり伝えていくということ、みんなで、宮城県民みんな
でやっていかなきゃいけないなという。

今、本気でとかですね、パッションとかいうお話もございました。

宮城が…東北ですね、なかなかパッションが外に出るというのがなくても、内に秘めてる
ものは、すごくあると思いますので、しっかりやっていければなと思います。

人から人へというのもございました。

あと、仕組みという話、あるいはネットワークという、さまざまなキーワードを本当、提
示いただきました。これからですね、本当に本気度が試されるなというふうに思っており
ますので、これからも…。

ただですね、宮城県は本当に、いろんな団体の方が伝承活動をしてますし、いろんなと
ころに、いろんなものも残ってますし、あるいは、語り部さんたちも頑張っていたいてい
るという、そういう状況にありますし、本当にこうやってご支援いただける方々がたくさ
んいらっしゃいますので、力を合わせて取り組んでいきたいと思います。

今後とも、どうぞよろしく願いいたします。

すいません、ちょっと約束の時間を過ぎてしまいましたけれども、以上で本日のセッション
を終了させていただきたいと思います。本日は、どうもありがとうございました。

○山崎氏 パネリストの皆さん、コーディネーターを務めていただいた伊東部長、あり
がとうございました。壇上の皆様に今一度、拍手をお送りください。

以上を持ちまして、宮城県主催プレナリーセッション「被災地からの経験・教訓の共有と
継承」を終了させていただきます。お忘れ物のないよう、お気をつけてお帰りくださいま
せ。

●以上●